

Interview

「農業未経験というハンデをバネに
いつまでも挑戦することを忘れず取り組みたい」

憧れていた「農業」という道

未知の世界に飛び込み

大きな夢を持った彼はヤル気に満ち溢れる

輝く後継者の思いとは…



おがさわら さとし (36) ●田子町出身で昨年3月に
JA相馬村管内でリンゴ生産者の道を歩み始めた若
手後継者のひとり。

道

南部田子町出身の元ホテルフロントマンという経歴を持つ小笠原聡さんは、昨年3月に就農した若手後継者の一人だ。父は運送業、母は専業主婦と農業には無縁であった小笠原さん。現在はJA相馬村青年部の一員として活躍し、地域の農業振興と高品質りんご生産に取り組んでいる。

幼い頃からの自身の憧れには「宇宙飛行士」「医者」そして、「農業」の3つがあった。ホテルマンとしてキャリアに磨きを掛け続けてきた一方で、リンゴ共販日本一である相馬出身の妻との出会いが小笠原さんの人生を大きく変えることとなった。それは、言つまでもなく農業というリンゴ生産者への道だった。妻の父である沢田さんはJA相馬村青年部長、青森県農協青年部協議会副委員長、相馬村農協共防連会長を歴任し、JA相馬村の農業振興に大きく貢献してきた組合員の一人である。4姉妹の父であるさんは農業に「あ

これが」を持つ後継者を必要としていたなかで、昨年3月に小笠原さんに転機は訪れた。

未知

小笠原さんは、義父の思いを胸に右も左も分からぬまま迷わず農業という夢に飛び込んだ。36才にして農業という未知の世界に第一歩を踏み出した小笠原さんだが、不安の面影は全く見受けられず、もはや「挑戦」という力強い意気込みとイキイキとした「笑顔」しか伝わってこなかった。

就農を機に、すぐにJA相馬村青年部へ入部。小笠原さんにとって相馬という異国の地で初めて話しかけられたのが佐久間康幸青年部長だった。彼もまた、神奈川県出身の若手後継者だ。心強い仲間をバックに小笠原さんは更に想いが熱くなったという。日々たくさんの知識と先輩方の経験を吸収しているなかで、叱られることも少なくなかないが、それは成長過程のひとつとして受け止め、無我夢中で

取り組んでいる最中だと話す。また、未知の世界を目の前に、リンゴに特化した相馬の歴史にも勉強中とのこと。陸奥によって先人たちが築き上げてきた飛馬ブランドがあるなかで、今も尚「陸奥」の栽培にも力を注いでいる。我々にとって歴史ある「陸奥」の生産量が減少している一方で、小笠原さんは「陸奥」を大事に残していきたいとも話す。

満ち

リンゴ栽培を学ぶ上で「夢」は広がるという。ヤル気に満ち溢れる小笠原さんは、「消費者があつての生産者が存在する時代だと感じることから、リンゴを食べる習慣を一人でも多くの人に持つてもらえるよう高品質生産に取り組む、誰もが認める美味しいリンゴを作りたい。また、今まで培ってきた人脈を活かし、自分のリンゴ、そして相馬のリンゴを世界中のみならず宇宙まで広げていきたい。」と意気込む。

温かな相馬の人たちに支えられ、彼の挑戦はまだ続く。



農業において後継者不足を迎えている一方、JA相馬村管内では多くの若手が輝いている。暖かい相馬の人柄に包まれながら奮闘する若い世代をピックアップして明るい農業を伝えて行きたいと思う。



相馬の仲間を支えられながら挑戦は続く